六級より初段へと七立てに疾る

実質一話分ですがどうしてもタイトルで分けたかったので二話更新です

俺の前にマネキンがいる。

「……………」

最低限のAIだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、正眼の構えで竹刀を構えている。

「……よっと」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に足をかけて転倒させる。そしてべしりと頭を一発。

「……まぁ、ルール的にはD評価だよな……」

俺の前にマネキンがいる。

「……………」

最低限のAIだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……よっと」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に足をかけて転倒させる。転ばなかったので回し蹴りをたたき込み、そしてべしりと頭を一発。

「……まぁ、ルール的にはE評価だよな……」

俺の前にマネキンがいる。

「……………」

最低限のAIだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、下段の構えで竹刀を構えている。

「……ふっ！」

突っ込んできたそれよりも早くこちらが突きを放つ、どうやら判定的には続行のようなので怯んだところを足掛け転倒、そしてべしりと頭を一発。

「……F評価あるんか……」

俺の前にマネキンがいる。

「……………」

最低限のAIだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、正眼の構えで竹刀を構えている。

「……よっと」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に足をかけて転倒させる。マネキンが転ぶよりも早く振り上げた竹刀をマネキンの後頭部に、判定的にダメらしかったのでべしりと頭を一発。

「わぁーったよ足掛けやめるよ！ なんだよG評価って……」

俺の前に強いマネキンがいる。

「……………」

最低限よりかはましなAIが搭載された、だがシャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……おっ」

突っ込んできたそれと鍔迫り合い、マネキンの腹を蹴り飛ばして怯んだところを胴体一閃。

「足技がダメなのか……とはいえE評価だ」

俺の前に強いマネキンがいる。

「……………」

最低限よりかはましなAIが搭載された、だがシャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……おっ」

突っ込んできたそれと鍔迫り合い、マネキンの腹を蹴り飛ばして怯んだところを胴体一閃。

「足技がダメなのか……とはいえE評価だ」

俺の前に強い剣士(・・)がいる。

「やっぱり、ここが境界線か……だが！」

俺が狙うは裏ボスの首ただ一つ、であればここですら通過点だ。

E評価だった。

未知を登ることの、なんと楽しいことか

銃落とせ銃